
HAZARD QUEST

マヨネーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HAZARD QUEST

【Zコード】

Z2942A

【作者名】

マヨネーズ

【あらすじ】

軍に入る者だけが通う学校。その学校名は「軍兵養成学園」とダメイ名前の学校だ。この学校は、「歴史」、「魔法」、「剣術」の3教科しかない。軍に入るための学校だという事も知らずに入学した「上崎一希」。一希はいろんな試練を乗り越えて行く事になる…。

第一話 学年のツツパリ番長

「王国歴324年。今から500年前に、普族との戦争がありました」

髪が残り少ない先公が、全く笑い声が出ない授業をやつてやがる。

俺は机にあごをつけて、時計をぼーっと眺めている。

授業がつまらないのは普通だ。だが、この禿げ頭の歴史の授業は格別つまらない。

俺は騒いでやらない事にしている。騒ぐと、禿げ頭の先公はストレスが溜まる。

そうすると、あの先公の貴重な髪は、ストレスで全部なくなってしまうだろう。

俺が騒がないのは、禿げ頭にこうした配慮をしているからだ。

俺はこの”学年”の番長的存在だ。学校の番長まではいかない（笑）

だから、俺が静かだと喧騒がない。騒がないと言つより、騒げないんだ。

授業があと少しで終わるという時だ。

禿げ頭の先公が俺を指名してきた。

「上崎、黒板をちゃんと見なさい！」

禿げ頭の先公がかん高い声で俺に怒鳴った。

俺が完全に禿げない様にフォローしてやつているのに、あんな態度をとりやがる。

俺は頭の中に血が一気に上った。

そして、俺は体の力を抜きだらだら立った。

俺は怒鳴られた事に対して、腹を立てていたので『チツ』つと舌打ちをした。

禿げ頭の先公は、鬼の様な形相で俺を睨んできた。

禿げ頭の先公が、親指と中指を擦つて『パチッ』つと指を鳴らした。

すろと、俺の足が石になつた。必死に足を動かしても動かない。

「驚きましたか？ これは魔法という物ですよ。

まあ、上崎に何回もかけてるから知っていますね。

貴方達は、次の時間は初めての魔法の授業ですね。

この学校に入学すると、習う事になつてているんですよ。

知つてるのは思いますが

禿げ頭の先公が得意気にいいやがつた。それがむかつぐ。

俺は別にあいつが禿げないように配慮しているのではない。

あの魔法のせいで騒げないんだ。あの魔法に何度も苦しめられたか。

「上崎、授業が終わるまで魔法は解きませんよ。

せめて、授業が終わるまで反省するんだな」

番長の威厳丸つぶれだ。このままでは、俺の威厳が効かなくなつてしまつ。

魔法の授業はマジで頑張らなねえとやべえ。

魔法がうまい奴が出現すると、番長の椅子はそいつに取られたも同然。

武力で魔力に勝つ事はまずない。

その証拠に、禿げ頭の先公に武力を用いて戦つてもまず勝てない。

頑張らねえと、俺は虐められる側に回つてしまふかもしねれない。

俺は授業が終わるまで、魔法の事を考えていた。

授業終了前一分前……。

「普族は魔法を使えませんでした。

魔法を使える我々を普族側の人々は魔族と呼んでいました。

ここ、中間試験で出題します」

禿げ頭の先公がそう言い終わらない内に授業終了のチャイムが鳴つた。

禿げ頭の先公が中指と親指を擦ると、俺にかかるついた魔法は解けた。

足が軽くなつて、空を飛べそうな気がした。開放感に俺は知らぬ間に浸つていた。

「起立。氣お付け、礼」

日直が早口でそう言つて授業は終わった。

次の魔法の授業が俺の天下分け目の戦いだ。思わずため息がこぼれた。

「どうしたんだい、上崎君」

ため息をついた俺を見て心配したのか、俺に話しかけてきた奴が居た。

俺は、そいつにはあまり見覚えがない。なので当然名前も知らない。そいつは瘦せていて、見るからに弱そうだった。

俺はわざと礼儀知らずな事を言つてみた。

「おい、てめえ誰だよ」

「神保 真一^{カミボ シンイチ}って言うんだ。よろしくね」

普通にそいつは名を名乗った。

こいつにはプライドという物を持つていないので。

俺があんな失敬な事を言つたのに、こいつは不快に思つていい様子はない。

でも、こいつはなんだか話しやすいような気がした。

「知つてるのは思うが、俺は上崎^{カミザキ}一希^{イチキ}。」

名乗られたので（名乗らせたと言つべきだ）こいつものりで名乗つてみた。

「へえ、一希って言つんだね。一希って呼ぶね。」

こいつは俺の事を怖いと思つていらないらしい。

一希と家族以外の奴から呼ばれるのは少し抵抗感があった。

しかし、なんだか良く分からぬが、そう呼ぶ事を俺は許した。

「一希の髪つて派手だね。赤色の髪の毛の人初めて見た。

それつて地毛なの？」

地毛なわけねえだろ！ そう重いながらも俺は

「当たり前だ。地毛に決まつてんだろ」

そう答えた。

なぜだか知らんが俺は堂々と染めたと言えなかつた。

俺は、こいつは馬鹿か？ そう思われるのは承知でこんな事を質問した。

「ここの中学校って何って言うんだ？」

神保は微妙に頬をあげた。单刀直入に言えば薄笑いをした。
俺に気を使って笑うのをこらえてくれたのだろう。俺はその解釈した。

「軍兵養成学園って言つんだよ」

ずいぶん変なところだな。俺は率直にそう思つた。

「ここは、その名の通り軍兵を育てる学校だよ。

教科は3教科。歴史、魔法、剣術。

この3教科だけ。

軍兵として必要なものしか学ばない様にしてあるんだ

「ほお、それは知らなかつた」

神保は少々呆れ氣味。苦笑いをしている。

「ちょっと呆れた。

ここに入ったからには軍に入らないといけなくなるのに。

そんな重要な事も知らないで入学したなんて呆れたよ、一希

俺はまさか軍に入ろうとは、これっぽちも思つていなかつた。

でも、軍に入るのも嫌と言うわけでもない。

この学校しか受からなかつたのだから、文句を言つつもりもない。

学力の低い俺には軍は上等。

俺は呆れ顔の神保に対して、笑顔を見せた。

「軍も別に嫌じゃねえぜ」

こつしていると、チャイムの音が学校中に鳴り響いた。

神保は急いで自分の席に着いた。

そして、いよいよ初めての魔法の授業だ……

俺は貴様を許さん

チャイムが鳴り終わった。教室を立ち歩いている奴は誰もない。なぜなら、初めての魔法の授業だから。

誰だって魔法には興味を持つだろう。使いたいという意志は誰しも持っているはずだ。

無論、俺も使いたいという意志は当然ある。

白い白衣を着た男が教室へ入ってきた。この男が魔法の授業を担当している先公らしい。

この男は見たところ若い。顔は好青年で、顔は悪くないタイプだ。左目には黒い眼帯を付けていた。一番最初にそれが目にに入った。

「これから魔法の授業を始める。

その前に、俺の自己紹介をしておく。」

若い男は緑色の黒板に、白いチョークを使い始めた。黒板には『高山 銀斬』と書かれてあった。

「俺は高山 銀斬。24歳独身。

魔法科担当だ。今日から貴様らの師だ」

こいつはやけに態度がでかい。生徒に自分は貴様らの師だと生意気な事を言い始めた。

少し生意気な野郎だと俺は真っ先に心の中でそう思った。

「魔法には、白魔法と、黒魔法がある。この二つの魔法の内、黒魔法は使つてはならない。

黒魔法は悪魔と契約して使う事ができる。

しかし、その悪魔は契約者の命を狙う。危険な魔法が黒魔法だ。白魔法は、己の体に潜んでいる魔力を呼び起こして使う魔法。貴様らが習うのは当然白魔法だ。」

そんな事はどうでもいいから、実技に入つてくれというのが俺の本音だ。

だが、魔法は上達したいのでノートはちゃんととつている俺。

高山がいきなり黒板を決して弱くはない威力で叩いた。

皆隣の席の人と顔を見合わせていく。

「よく見ておけ。今から魔法を見せる」

高山の手のひらの上に白い玉ができていた。その玉は太陽の様に輝かしかつた。

「これが何だか分かる奴はいるか

高山は手のひらの上に白い玉を乗せたまま、皆に問うた。

俺は高山から興味を引いて、魔法を教えてもらいたかったので、手を上げた。

白い玉が何だかは分かつていない。だが、手をあげてしまった。

「そここの赤髪。言ってみよ

高山の低い声に、少し心臓の鼓動を速くさせられた。

「エネルギー」

俺は自信なさげな声でそう言った。無論、適当だ。

高山は無表情で、鼻で笑つた。

「馬鹿」

その一言だ。俺の発言に対する言葉は。

「あの白い玉は魔法だ」

そのまんまじやねえかよ。誰もがそう思つたはずだ。無論、俺もう思つた。

「先生、それはどうやつたんですか」

神保が高山に率直な質問をした。

「今から説明しようとしていたところだ。今説明しておこう。

我々の体の中には魔法エネルギー、すなわち魔力が潜んでいる。さつきはその魔力を引き起こして、あの光の玉をつくったのだ。あれは、2つ利用価値がある。

一つはただの光として使う。一つは敵にダメージを与える。

魔法名は光弾。超初級魔法に分類される。

上級者が使うとのと、初心者が使うのとでは大違ひな力を發揮する。

それはどの魔法も共通だ。」

皆興味心身で高山の話を聞いている。俺もその中の一人だ。

「使い方は簡単ではない。いかに初級魔法とは言えども、初心者の貴様らには難しい。

体内の魔法工ネルギーを自分の手に集中させるんだ。

やり方はそれだけ。頑張れ。以上。

今日はその練習だけだ。この中で3人ぐらじてただけでも上出来だな」

俺が一番でならなければならない。一番先にできないと俺のプライドが許さん。

俺はいわいる唯我独尊つて奴だ。俺は今までそりやつて生きてきたんだ。

ここでも一番だ。俺だけが一番。そうでなくしてはならないんだ。

「先生できました」

その声を聞いて俺は信じられないとしか思わなかつた。

俺よりも先に成し遂げるとは許しがたい」と。

「ほお、上出来だな。貴様、名をなんと言ひづ

そいつは、眼鏡をかけていて、いかにもガリ勉君といった感じだった。

「セイリュウ
青龍 リュウマです」

ガリ勉君とは思えない名前だ。てか、かつこよすぎるのは前じゃねえか。

「なかなかかつこいい名前だな。覚えておこう。

貴様、なかなかいい筋をしていくぞ」

青龍は褒められてもにこりともしない。

こいつは、皆に注目されて最高の気分に浸つてゐるはずだ。

なのに、にこりともしやがらねえ。しかも俺より先に出来やがつた。許さねえ。絶対許さん。後でぶつ殺してやる。

「以上でこの初回の授業を終わる。

めんどくせえ挨拶はいらん。終わりだ」

そういうて高山は教室を出た。こういう先公もいるんだなと思った。授業が終わると俺は、真っ先に眼鏡野朗のところへ突っ走つていった。

「貴様、俺と怠慢張れ。生意氣なんだよ

俺は青龍のむなぐらをつかんで怒鳴つた。

「いいけど、僕に勝てると思ってているのかい」

自信に満ちた声で俺を挑発しやがつた。俺の我慢はもう限界だ。

俺は一発こいつの面にパンチを入れてやろうとした。
青龍が消えた。

どこだと思つて俺は後ろを見た。

すると信じられない事にあいつがそこに居た。

「僕はここだよ。どうせなら本気を出して欲しいな」

こいつの自信の満ちた声に俺の怒りは爆発した。

「俺は貴様を許さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2942a/>

HAZARD QUEST

2010年11月14日09時29分発行